舞台「私　精神科医編」動画配信×トーク

見逃し配信 特典映像 2020年度権利擁護システム研究会　第2回
精神科病院における治療文化を変えていくために

2021 | 土 | 3/13

オンライン イベント

ZOOM ライブ配信

権利擁護システム研究会 2020

開室	12:40
舞台　私 精神科医編	13:00
アフタートーク	14:00

トークテーマ

どこまでが「私」でどこからが「精神科医」か？
「良かれと思って」の怖さ

グループディスカッション　質疑応答　15:30 終了

くるみざわ しん さん
劇作家　精神科医

竹端 寛 さん
権利擁護システム研究会

見逃し配信 3/14-3/31

「私 精神科医編」　本編　1,500円

vimeo ON DEMAND
ストリーミング期間24時間

「私 精神科医編」　本編 +アフタートーク　カンパ付き 2,000円

vimeo ON DEMAND
ストリーミング期間3日間

「私 精神科医編」　本編+ アフタートーク+特典動画　カンパ付き 5,000円

vimeo ON DEMAND
ストリーミング期間30日

ライブ配信 参加費 3,000円

見逃し配信「私 精神科医編」本編+アフタートーク　3日間無料クーポンつき

お申込み Peatix

https://seisinkai0313.peatix.com

動画配信の収益は、トレンブルシアターの活動と
大阪精神医療人権センターの活動を支える資金になります。

2020年4月に予定されていた「精神病院つばき荘」は緊急事態宣言により公演延期になりました。コロナウイルスの影響は、精神科病院への面会や訪問活動だけでなく、表現という手段で発信する機会も難しくしています。私たちの権利擁護活動も、舞台・演劇も継続を模索しながら動画配信によってファンのみなさまとつながり、コロナ収束後のイベント再開を願って企画するのがこのライブ配信です。「精神病院つばき荘」を楽しみにされていたみなさまへ、トレンブルシアターの舞台と、くるみざわしんさんのトークをお届けいたします。
この動画配信の収益は、私たちの活動を支える資金になります。また、コロナ禍において激変した演劇活動を応援するカンパも含まれています。

権利擁護システム研究会 2020

舞台「私　精神科医編」動画配信×トーク

見逃し配信 **特典動画** 2020年度権利擁護システム研究会　第2回
精神科病院における治療文化を変えていくために

精神科病院で勤務する精神科医が仕事帰りに行きつけの食堂に寄る。食事を終えて紅茶を飲みながら、病院勤務のソーシャルワーカーだった食堂の主（あるじ）に、その日に起こったことや入院中の方とのやり取りを話しているうちに、「精神科医」という羽織をかぶってごまかしてきた自分自身の内面が露わになってゆく。精神科病院に入院中の方が自由に外出ができないことや、持ち物が制限されること、さらに保護室や拘束による治療に意味があるのかという問いかけが始まる。

「完全に治ったという証明書を持って来いって職場から言われたんですけど」

診察でそう打ち明けられる度に、またかと思う。医師になった当初は「申し訳ないんですけれど、『完全に』は証明できないんですよ」と断っていたが、これって職場から病者を排除するために雇い主が医者の証明書を悪用しているだけじゃないかと気が付き、職場の上司に来院を促して、患者のいる前で、「ガンバレと早くを職場の禁句にしてください」と言うようにした。上司はたいてい苦虫を噛み潰した顔になる。私は苦虫になった気分で患者を見る。うっすら笑っていることが多い。しぶとい上司だと「ガンバレと早くを禁句にしたら仕事になりません」と言う。「じゃ、ユーモアを忘れないで」と返すと目を白黒させる。上司もたいへんなのだ。

無理無体な要求をあの手この手で切り抜けないと成り立たないのが精神科医療の現場だが、公演するなら検査を受けて新型コロナにかかってないことを証明しなさいという要求にはマイッタ。検査でわかるのは限られた正しさだし、感染症は証明書発効後にうつる。実のない診断書を掲げないと芝居ができない。排除される。お客様への誠意がないと言われる。今度は私が当人になって『完全に』を証明しなくてはならない。お金を払って検査を受ければ証明書を書く医者はいる。金がないなら無償で検査を提供しますよという財団もある。新型コロナを商機に自由診療を拡充し、保険診療を切り崩して一儲けを企む方々に頭を下げるべきか。アメリカで新型コロナの死者が多いのは医療格差に原因があり、その元凶は市場原理に貫かれた医療体制にある。検査を治療でなく、不安の解消のために売り込む手口は実は不安をあおり、排除の論理で世の中を串刺ししてゆく。自粛警察ここにありだ。

「コロナよりも人が怖い」―敬愛する先達の声が聞こえる。どうせ立つなら排除される側に立つ。芸術も医療もかくありたい。それでないと守れない当事者性を失調したくない。新型コロナが世に登場する前に、そんな思いで書いた一作を今、世に問うてみたい。

くるみざわしん（劇作家、精神科医）

見逃し配信 特典動画

権利擁護システム研究会　第2回
精神科病院における治療文化を変えていくために

―精神医療の土台にあるのは生きることの苦しみに耐えている人への尊敬。『尊厳』の反対は『軽蔑・差別』、それをはね返すのが『人権』。精神医療が精神医療であるためには『人権』は欠かせない―

精神医療のあるべき姿を語るくるみざわしんさんは、シェイクスピアが書いたセリフ、患者さんが診察で語った言葉などを使って、精神医療の「治療文化」の現状を照らし出し、その現状に変化をもたらすための5つの道具（視点）を提案する。「今日はこんなことまで話すつもりはなかったけれど」・・・「治療文化」を変えていくために私たちにできることは？

問い合わせ

検索 大阪精神医療人権センター
http://www.psy-jinken-osaka.org/

認定ＮＰＯ法人大阪精神医療人権センター
〒530-0047　大阪市北区西天満5-9-5　谷山ビル9F
TEL: 06-6313-2003/FAX: 06-6313-0058
Email: advocacy@pearl.ocn.ne.jp

入院中の方やそのご家族からの電話相談
06-6313-0056 原則水曜日 2時～5時